

へき地小規模中学校における学習支援活動を通じた 教職課程履修学生の成長と変化

伊 井 義 人 (藤女子大学 人間生活学部 人間生活学科)

松 原 謙 二 (石狩市立厚田中学校)

本報告では、2015年度の石狩市立厚田中学校で実施した学習支援活動に関わる学生の振り返りを通して、学生の変化と成長を考察する。そのテーマとしては、「授業内での学習支援」「学校行事」「家庭科の授業」に関する振り返りである。それらを時系列的に考察した後、学習支援継続に係る中学校側からの提言を紹介し、今後の展開を提示したい。

キーワード：学習支援、へき地小規模校、学生の成長と変化

はじめに

2015年度末で、石狩市立厚田中学校において、藤女子大学の学生が学習支援を継続して、5年目を終えることになる。この学習支援に参加した学生の約半数は、大学卒業後、教職に就いている。卒業により、学生の顔ぶれが変化するだけではなく、管理職を含めた中学校側の教員も変わってきた。本稿の執筆者の一人、厚田中学校の松原氏は、5年間で本学が学習支援でお世話になった3人目の教頭となる。

毎年度、学習支援そして、それに関連する報告書のテーマは少しずつ変化させている。今年度は、ソーシャルネットワーク (facebook) に学習支援で厚田中学校を訪問するたびに、学生に書いてもらったコメントや感想を分析しつつ、厚田中学校での学習支援を通して学生が何に気づき、そして、それに対応して、学生自らがどのように成長・変化していったかを時系列的に明らかにしていきたい。その変化を明確にすることを通して、本稿を来年度以降の学習支援の発展に寄与させていきたい。なお、学生のコメントに関しては、明確な誤字脱字を除いては、匿名で原文のまま掲載している。

コメント・感想を書いた学生は全て教職課程を履修しており、その多くは3年生である。また、それ以外の属性を持つ学生が記述した感想については、その都度、その旨を明記した。なお、本稿では、松原は「5」の「中学校からの助言」を担当し、伊井はその他の部分を執筆した。

1. 2015年度の厚田中学校での活動の概況

2015年度、厚田中学校を訪問したのは①5月29日 (数学・特別支援)、②6月27日 (運動会)、③7月3日 (数学・特別支援)、④8月20～21日 (学習支援・調理実習)、⑤9月3日 (数学)、⑥10月23日 (家庭科模擬授業)、⑦10月26日 (家庭科模擬授業)、⑧11月6日 (家庭科授業：1回目)、⑨11月20日 (家庭科授業：2回目)、⑩1月19・20日 (餅つき大会、英語・美術)の計9回であった。これに加え、7月19日には、学校行事ではないが、厚田神社の祭事で、中学校の教員や地域住民の方々と漁船に乗る経験もした。

今年度がこれまでの取り組みと異なる点は、第1に特別支援学級に学生が参加した点、第2に小中合同運動会に参加した点、第3にティームティーチングの形式で、家庭科の授業を2度実施した点である。

2. 授業内での学習支援を通じた学生の成長と変化

授業内での学習支援は、3回あったが、まずはそれらに参加した学生のコメントの変化を追う。5月29日の1回目の学習支援であるが、参加学生に共通する感想には、「初めての小規模校」に対する驚きと新鮮さが書かれている。そして、それに伴う学校全体に流れる温かい雰囲気を感じ取っていたようである。その一方で、初回ということもあり、授業に対する感想は、抽象的な内容にとどまっている。その代表的なコメント

は以下のとおりである。

授業を見学させていただいて、先生方も一人一人の学習状況を把握しておりしっかり生徒と向き合える環境であることが少人数ならではの授業だなと感じました！また、授業の合間の休み時間にも先生が教室にいて、生徒と交流しており、先生と生徒との距離がとても近く感じました。

厚田中の生徒さんたちからはあまり学年の壁を感じることはありませんでした…学年が違って名前前で呼び合ったり昼休みには体育館でみんなで遊んでいる様子がとても微笑ましかったです。

(Fさん)

ここでは、小規模校ならではの教員が生徒と接する際のきめ細かさ、そして、生徒同士の距離の近さを学生たちは感じていることがわかる。参加学生の多くは、札幌圏もしくは道内の地方都市の出身である。そのため、学生自身が経験した中学校自体の生活とは異なる雰囲気厚田中学校には感じ、それを肯定的に受け止めている。ただし、先述したとおり、どのような要素が、少人数ならではの特色なのかなど、具体的な考察はなされていない。

このようなコメントが、6月の運動会への参加を経験した後、7月の学習支援では、以下のとおり、より具体的な内容を含むようになってきた。

今回の数学の授業は初回の時のように見学という形ではなく一人一人について教える、という形で、少し不安もありました。教えているうちに、生徒の反応や表情を見ながら教え方や言い回しを変えたり、理解してくれたときは生徒もうんうん、と頷いたりしてくれたこともあり、とても教え甲斐がありました。(Fさん)

わからない生徒に上手く答えを導き出すように誘導するのがとても難しいと感じました。どのように指導したら上手く伝わるのか、というところをもっと学びたいなおもいました。(Jさん)

これらのコメントには直接的には書かれていないが、中学校の担当教員の教授法を観察したうえで、「生徒個々人に対応した教え方」が必須であると感じ、それを学生自らも実践しようとしている様子が見て取れる。また、そのような実践の結果、僅かながらも中学生が反応してくれて、そこにやりがいを感じている。

これが、更に9月の学習支援時では、下記のように

コメントが変化していく。

自分で問題を解いているときに解き終わった問題で間違えを見つけたときそのときに声をかけてもいいのか、次の問題を解いている途中には声をかけない方がいいなと思ったのでタイミングが難しかったです。でも私が気付いて教えたところがテストに出て解けたらいいなと思い頑張りたいなと思いました。何度も訪問を重ねるごとにわからないことを気軽に聞いてくれるようになったり話しかけてくれたりするようになってとても嬉しく思いました。(Yさん)

この頃には、学習支援自体は3回目であるが、夏休みの調理実習などを通じた交流も経験しているため、中学生と大学生との距離も近くなっている。また、教え方についても、ヒントや生徒に気づきを促すタイミングなどに学生が関心を持ち、そして、定期試験直前の学習支援ということもあり、学生自身が教えたところが出題されれば良いなどの「欲」がでていところも微笑ましい。ここまでのコメントはすべて3年生が記したものである。この学年は、後述のとおり、11月には学習支援という枠を超え、実際の中学生を対象として、家庭科授業を行うこととなる。

最後に、教育実習を終え、2016年4月から教壇に立つ4年生からの学習支援のコメントを見てみたい。彼女たちは、基本的には3年次から2年間、厚田中学校での学習活動に関わっている。中には、2年生の後半から学習支援に参加している学生もいる。

学習支援では「答えの導き方」を教えるのに苦労していました。私自身も中学生の頃は数学が苦手でした。だからこそなのか、ついつい答えまで全て教えてしまいそうになり、ヒントの出し方に悩みました。しかし、先生方の授業を見学させていただいているうちに、先生が生徒のすぐ側に来て、「何かあったらいつでも聞いてね」という雰囲気作りだけで、生徒のやる気を引き出し、自力で成長していける一番の近道なのではないかと感じました。失敗を恐れる生徒が多くなりましたが、先生の励ましの一言葉があるだけで、どんどん成長していく姿に感動しました。その出来事があったからこそ、春から中学校教員になることを決意できた、と言っても過言ではありません。(Aさん)

授業の見学では大きく二つの事を学びました。一つめは、教材を使った教員と生徒の対話、生徒

のアウトプットの場づくり、です。英語の授業では、サイコロ、カード、写真様々な教材を使い、学んだ文法、単語を使う場が多く設けられてました。家庭科は特に生徒の生活が実践の場になるように工夫しなければなりません。知識をどう使うか、「使い方、使う場面」も想定して授業を構成していかなければ…と改めて思いました。

二つめは、「声の掛け方」です。これは美術の授業から学びました。絵を鑑賞して、感じたことを話し合う、発表するというものでしたが、先生の声かけの中に「みんなが感じたこと全て正解、間違っているとかはない」という風な声かけがありました。さらに、「皆も美術家や学者と同じようにもの見る力、考える力がある」と。ただ知識や見方を伝えるだけではなく、生徒自身が持つ「力」に気づかせることもできるのだな、と感じ、言葉の言い回し、意図を持って物事を伝えることが今後、私が身につけたい力だと思いました。

厚田ならではの少人数だからできることかもしれませんが、考えれば大きい学校でも形を変えて実現できるはず！と思ったので春から学んだことを意識して授業をしていきます。(Nさん)

学習支援では「答え教える」のではなく、「答えの導き方を教える」ということの大切さを実際に体験しました。難しいことではありますが、生徒のひらめいたときの顔がわすれられず、教員になるための原動力になりました。(中略)そして、先日の最後の厚田中学校では、英語と美術の授業見学から「自分の言葉で話す・伝える力」の伸ばし方を学びました。頭で考えてひらめくことよりも、その考えたことを自分の言葉で伝えることはとても難しいことです。社会人になってからも必要な「考えを自分の言葉で伝える力」を中学生から授業に組み込み伸ばさせていくことが大切であると思っただけではなく、自分が授業を組み立てる際に実践してみようと思いました。(Hさん)

紹介したコメントを書いた学生はすべて教員採用試験に合格し、教員となることが内定している。そのため、学習支援も、自らが教壇に立つことを前提として、参加し、コメントを残していることがわかる。また、彼女たち4年生は教育実習を経験していることもあり、実習が未経験の3年生とはコメントの着眼点や質も異なることが明確であろう。学習支援を担当する教員としては、これらの着眼点を可能な限り早い段階で下級学年にも修得してもらおう工夫をすべきであること

考えている。

3. 学校行事での経験を通じた学生の感想

授業以外での行事には運動会(6月)・文化部との調理実習(8月)・合格祈願餅つき大会(1月)と学生たちは3度、参加した。授業時間内の学習支援では、なかなか中学生と交流する機会を持つことができない。そのため、授業以外の場で、中学生の生の声を聞きながら、交流を持つことは、教員の幅広い業務を知る上でも、生徒たちの多様な「顔」「表情」を見る上でも、学生にとっては有意義なようである。まずは、運動会のコメントから紹介したい。

生徒たちはたくさんの競技があるため忙しそうにしていますが、小学生の競技の時は中学生がお手伝いをしたり、中学生が競技の時は小学生がお手伝いをしていて、児童・生徒たちの絆の強さに驚きました。また先生たちと地域の皆さんの連携がとてもよく、雰囲気もよくて子どもたちのために準備する姿はとてよかったです。みんなで作り上げた運動会は生徒たちはもちろん、地域の方もみなさん楽しそうで厚田はとていいところだなあと来るたびに実感させていただいております。(Yさん)

大漁旗にも感動しましたが厚田音頭などを通して伝統、地域との関わりについても肌で感じることができました。小中合同ならではの、中学生が小学生を率先して引っ張る姿も見てて微笑ましかったです(Fさん)

これらのコメントからは、小規模の小中学校ならではの教員・児童生徒の連携に対して、学生たちは驚きを感じていることがわかる。そして、学内の連携だけではなく、学外の地域の方々との協力体制を通して、普段の授業からは見ることができない、地域と学校との繋がりの強さや、子どもたちのたくましい姿を見ることがわかる。

また、1月に参加した合格祈願餅つき大会でも、以下のとおり、類似した感想が述べられている。

今回の餅つきでは、生徒の自主性と可能性を感じました。いつもは授業中の姿しか見ることはできませんでしたが、行事でリーダーシップを発揮したり、家族仲良く餅をついていたり、また違った表情を見られ、これからどんな大人になってい

くのかなと楽しみにになりました。特に3年生は1年生の頃から見えてきたので、3年間の成長を見られたことは非常に嬉しかったです。

また、地域の人々の協力があって学校が成り立っていると改めて実感しました。学校と保護者、地域の方々に見守られて成長していく生徒の姿を見て、相互の協力がなければここまで成長できないのだなと思いました。(Aさん)

このコメントは、継続的に厚田中学校での学習支援に関わってきた学生のコメントなので、「地域に見守られた、子どもたちの成長」に気づいている。とはいえ、運動会や餅つき大会は、学生たちは「ゲスト」として、参加するにとどまっている。夏休みに実施した中学生との調理実習では、次の通り、行事(イベント)を実施する難しさを体感したようである。

調理実習ではやはり準備が不十分であったと思いました。もっと積極的に代表者のサポートをしなければならなかったし料理の手順や注意することなど確認する必要があったと思いました。調理を進めていくと子どもたちとコミュニケーションをとったり正しいやり方で包丁を使っていたし楽しくできたのでそこはよかったです。(Yさん)

今回の経験は本当に貴重なことばかりだったのでこれを生かして今後も頑張りたいと思いました。自分もまだまだ成長しなければならぬと感じたので頑張りたいと思いました。(Yさん)

調理実習に対して、中学生がどの程度の理解力を



写真1 大漁旗と運動会

もっているかがわからない中で準備をしていくことは難しい取り組みであったであろう。しかし、今回の実習を通して、準備や実習の段取りの大切さは実感できたのではないだろうか。

4. 模擬授業と家庭科授業での経験を通じた学生の変化

これまで毎年、教育実習前の2～3年生が、厚田中学校で家庭科の授業をする機会を提供していただいている。手順としては、①中学校から単元の提示、②学生による指導案の作成と大学教員によるチェック、③中学校での模擬授業、④大学での指導案の再構成、⑤家庭科授業の本番となっている。今回は、学生4名が「食領域：食品添加物」「消費領域：買い物の選択」の単元を2名ずつのチームで実施した。今回の学生によるコメントは、中学校で模擬授業を実施した直後と、本番の授業後のものである。

自分でやってみると気づかないことが多いですが消費領域の2人の授業を見て感じることも多く、仲間の大切さを感じました。

厚田中学校の先生方にも見ていただき自分では全く考えつかなかったアイデアやアドバイスをいただき大変勉強になりました。中学1年生にわかる授業をするためには自分たちが思っている以上にわかりやすくする必要があると思いました。まだまだ不十分な面も多いですが生徒からすれば先生という立場になり、生徒たちにとっては一生に1回しかない授業なので責任を持ってやらなければいけないということを感じました。子どもたちと楽しみながらも記憶に残るような授業をできるように本番まで詰めていきたいと思います。

(Yさん)



写真2 調理実習の風景

授業をしてみて、自分はまだまだ考える力や想像する力が足りないと感じました。

グループを作るというだけでも、どのようなメンバーでグループを組ませるのか、グループワークの意図はなんなのかなど考え直すべきところは沢山あるので、じっくり計画を練り直したいと思います。

まとめにもっていくために生徒に何をさせるか、何を考えさせるか計画立てて行くと良いと教頭先生に教えていただきました。自分にはそれかまだ出来ていないなと思いました。

生徒たちが私たちの授業にどのような反応を見せてくれるのか本番がとても楽しみです。

(Sさん)

これらは、模擬授業後のコメントである。ここでは、学生による三つの気づきがある。

第1に、他の授業からの学びである。自分たちだけが頑張っている、その考えには限界がある。しかし、他者と比較検討することにより、多くのことに気づき、それが結果的に自らの授業の改善にも繋がることを経験している。

第2に、中学生を対象にした授業の創造力の大切さである。授業計画は立てているが、果たしてそれが中学生にとって理解可能な内容なのか、少し難しい内容ではないかを、中学校の先生から指摘され、初めて気づいている。これは、指導者が常に中学校や高等学校の教壇にたっていない大学では指導が難しい領域である。

第3に、授業は、中学生にとっても大学生にとっても一期一会であり、その一度きりの「出会い」に対する責任への気づきである。大学では、模擬授業を何度か経験しているが、それは大学の授業の一環であった。対象も大学生であり、友人でもある。やはり、目の前に中学生がいることへの責任は、実際の学校でなければ経験することはできないのである。

そのような模擬授業での振り返りを通して、学生たちは家庭科授業の本番を迎える。ここでは、少し長くなるが、授業を実施した4名全員のコメントを一部ではあるが提示したい。

大学生に向けての授業をしたことは何度かありますが実際に生徒に向けて授業をするというのは初めてで中学1年生がどの程度理解してくれるのかがとても心配でした。

教える側として人生に一度しかない授業をするにはまだまだ勉強不足だと感じました。実験を重

要視しすぎたために食品添加物の学びのところが薄くなってしまったと思います。まだまだ多くの知識を増やしていかなければならないと感じました。

また指示出しの重要性です。大学生は求めた答えが返ってきてなにも言わなくても淡々と進めることができますが中学生に向けてはやはり細かく、しつこいぐらいの指示出しが大切だと思いました。生徒たちの考えを引き出すための質問をするのも生徒たちの印象に残りやすいのかなと思いました。生徒たちが一番理解しやすいような印象に残りやすく、考えさせるような授業を考えられるようになりたいと思いました。(Yさん)

最初はとても緊張していたのですが、生徒の反応が良く、進めていくうちに授業のしやすさを感じました。(中略)実験を取り入れた授業をしたのですが、どのくらい時間がかかるのかやワークシートをもう少し工夫できた点がいくつかやっていて感じました。中学生を相手に授業するということで、どんな答えや反応がくるのか、というあらゆる可能性を考えた上でワークシート作成をしたり指示出しをすることが必要だと思いました。また、実験をしていて生徒が普段の食生活と結びつけながら考えている様子を見て、今回私たちはあまり出来ていなかったのですが、身近に感じてもらうため、普段の食生活と結びつけながら考えてもらえるように促す発問の仕方ができるようになればと思いました。授業中に先生方が生徒のサポートをしてくださっていたのを見て、机間巡視の大切さや授業中での生徒とのコミュニケーションの取り方なども学びました。今回私たちが授業をやってみての反省点もありましたが、生徒の発言・行動や、先生方の言動によって気づくことがたくさんありました。(Fさん)

今回は2年生の授業でした。1年でこんなにも違うのかと思うくらい2年生は落ち着いた雰囲気、しっかりと指示も通るので説明していない側がなにをされているのかわからず少し困りました。T.Tのやり方をもっと勉強して、どんな学年でも対応できるようにしていきたいと思いました。

また、先生の助言の仕方も大事だと学びました。机間巡視の際に積極的に生徒と話したり発問を投げかけたりするのを心がけていました。ですが、それが逆にやりすぎであったり、生徒を悩ませてしまっていたので生徒にもう少し自由にやらせて

あげればよかったかなと反省しています。わたしたちが一番伝えたかったことが生徒に伝わっていたかなと感じたので、そこは良かったかなと思います。この経験を糧に、これからの模擬授業や教育実習にも生かしていきたいと思っています。

(Jさん)

終始緊張していたのですが、生徒の表情・反応を見て理解してもらえてるかな？もうちょっと詳しく説明しようかな？などと考える余裕はあったのでそれは良かったかなと思います。

わかんない。わかる！それ興味ある！発言したい！など感情が表情に出る生徒が多くて助けられました。生徒の表情・反応を見ることは生徒も教員自身も助ける大切な作業だと気付きました。

理解度に応じて授業を修正していけるので、この作業は忘れないよう心がけていこうと思います。

全体的にもうひとひねり考えることが出来ればよかったと反省しています。(中略)この反省を忘れず、しっかり生かしていきます。今回、わたしたちが授業を通して伝えたかった内容がちゃんと伝わっていたことが一番嬉しかったです。

(Fさん)

このように、中学生に向けた本番の授業は、学生たちに多くの学びを提供してくれた。それらを要約すると次の四点に集約できよう。

第1に、大学での模擬授業とは違う、中学生の反応の違いである。事前段階でも気づいていたところでもあるが、中学生の実態に対しては、やはり授業本番では戸惑いに近い経験をしたようである。また、教え方だけではなく、指示出しの大切さにも気づいているようである。

第2に、身近な生活との関連づけの大切さである。家庭科という教科の特性上、この辺は大学での模擬授業でも既に工夫している点であろう。しかし、中学生の日常生活という観点を一層重視する必要に学生たちは気づいたようである。

第3にティームティーチング(T.T)の難しさである。これは、今回の家庭科授業の特殊性であるが、同じ学年の仲間と協働で授業を構築し、的確に役割分担をするためには、事前準備が大切であることを一層感じたようである。

第4に、臨機応変な対応の大切さである。授業準備をいくら綿密に行っても、偶然の出来事は避けては通れないものである。ただし、幅広い教材研究など



写真3 家庭科授業の風景

で準備を深くやればやるほど、偶然性への対処は可能となる。生徒の表情や反応に柔軟に対応できる準備が必要であることに学生たちは気づいたようである。

5. 厚田中学校からの助言

藤女子大学とSATというかたちで関わり5年間が経過した。初めは、どのように関わったり、支援できるか模索してきたのだが、形としては、数学の授業の個別支援、家庭科のプレ研(事前指導)・研究授業、文化部とタイアップした調理実習、合格祈願もちつきと多岐にわたってきている。

以下、これまでの活動を振り返り、藤女子大学の学生SATについて整理してみる。

【藤女子大学のSATに参加するねらいへの捉え方】

1. 大学に通学している学生が石狩市の子どもとかわることで学生の資質を高める。
2. 大学の地域貢献。
3. 教職課程を選択し、将来、教師を目指す学生に、教育実習だけではなく、日常的に子どもに関わらせることで、机上での勉強だけでなく実践を積み重ねることができる。教育とは何か、教師はどうあるべきか考える機会になる。
4. 毎年継続して取り組むことで厚田の地区とつながり、地域との連携をすすめることができる。
5. 夕食会等で、厚田中の教職員と交流することで、現場実践している先生方の生の声を聞くことができ、意欲を高めたり、現場の厳しさを感じることができる。
6. 家庭科の研究授業をさせてもらうことで、授業研究の仕方、授業づくりをゼミで取り組むことができる。

【厚田中学校のねらい】

1. より生徒に近い年代の学生が学習支援をする事で、学力向上につながる。
2. 文化部とタイアップした調理実習は、文化部の活動の幅を広げてくれている。
3. 合格祈願もちつきの時にスタッフとして働いてもらえる。
4. 少人数で学校生活を過ごし、教育実習生もほとんど来ない環境の中で、お姉さんの存在の大学生にかかわっていただき、自分たちの一つの目指す姿と捉えることができる。

せっかくのSATの事業であるから、両者にとってプラスになるような取組としたい。そこで、成果がわからなかったり、課題となっている点をあげてみたい。

1. 学習支援がどのような形で行われることが、大学生が生徒の個別支援をしやすくなるのか。生徒にとって教えてもらいやすくなるのか。
2. 教科としては数学が適しているのか。
3. 授業としてのかかわりの他に、支援の形は考えられないか。
4. 大学生はどのような意識で参加しているのか。
5. 本当に大学生のプラスになっているのか。
6. 中学校のプラスになっているのか。

以上の点を踏まえながら、筆者（松原）の考えは以下のとおりである。これらを活かしながら、来年度以降のSATに役立てていきたいと考えている。

1. 授業支援については教科担当との連携が重要となる。現在の本校の数学担当としては、「問題練習やテスト勉強的な場面でかかわってもらくと助かる。」と言っている。教科担当と相談し、来ていただける期間の数学の授業で問題練習になりそうな日程を事前に知らせ調整できると良い。
2. 大学生が共通に指導しやすいのは数学である。
3. 放課後学習会への支援はどうだろうか。但し、3年生は部活動を引退してからになるため、8月以降の放課後になる可能性が高い。また、降雪前の季節に、15:40~18:00となるが学生の対応はどうか不明である。
4. 今年度の大学生は比較的消極的ではないかと前からいた先生方の声があった。関わりたいけれど関われない学生はいる。その中でも日々、努力していくのであれば良いと思う。しかし、「このぐらいでいいや」という感覚でいるのならば、成果はあ

がらない。どちらにとってもプラスにはならない。

5. 中学生にとって、地域・保護者の人々以外からかかわってもらえるのは、何らかのプラスになっていると考える。意識・意欲は必ずかかわっている人に伝わると考える。

ここには触れていないが、家庭科のプレ研・研究授業は良かったと思う。学生の真剣さ、何度も改善したようすが感じられた。生徒もその頑張りや答えようとしていた。ただし、今年度については、もっと学生に積極的にかかわって欲しかったところが我々厚田中学校の教職員の感想である。

おわりに

ここまで、学生による学習支援活動の振り返りの分析と、中学校側からの提言を記述してきた。学生の振り返りからは、学習支援の経験を経るにつれ、雰囲気のみや抽象的な表現記述から、実践的かつ具体的なコメントに変化していることがわかる。さらには、心情的にも、授業を支援する立場としての自覚が芽生え、そこに責任感をもつようになってきていた。それらを踏まえ、最後に、これまでの振り返りと提言を整理しつつ、今後の学習支援の展開への示唆を3点だけ述べたい。

第1に、学生への定期的なフィードバックの必要性である。今回は、振り返りという形で、中学校を訪問するたびに、学生からは感想・コメントを、一年間継続して、記述してもらった。これは学生たちの変化・成長を実感する上で、重要な取り組みであったといえる。その一方で、そのコメントに対する即時的なフィードバックを大学教員から学生に対してはしてこなかった。そのため、次年度以降は、逐次、感想やコメントから、学生たちの気づきを成長に変えるようなフィードバックを実践していきたいと考えている。特に、学生たちの着眼点は、時を追うごとに、より具体的に変化してきている。そこに対応して、具体的な助言を加味するよう工夫していきたい。

第2に、学生たちの積極性の問題である。厚田中学校での学習支援を継続する際、どうしても「距離の壁」を乗り越えなければならない。そのため、このプロジェクトに特定の学生が継続的に参加すること自体、積極性の表れとも考えることができる。ただし、実際の中学生や教職員との関わりの中で、学生自らの問題関心を明確化し、交流の中で様々なことを吸収していく姿勢を学生たちが身につけ、表現できる工夫が、今後必要であることは間違いがない。

第3に、新たな支援の場の創出である。中学校側から、高校受験を目前に控えた3年生を対象とした放課後学習会への学習支援の提案があった。もちろん、先述のとおり、距離の問題など解決すべきことも多々あるが、6年目を迎える2016年度は、支援をルーティン化することなく、新たな可能性を中学校とともに模索していきたい。

注

- 1) 2014年度報告：伊井義人、中村伸次他3名「『授業力』の向上を目指した大学生による学習支援活動—厚田中学校における家庭科の授業を視点として—」『藤女子大学 QOL 研究所紀要』第10巻、2015

年、153～160頁。

2013年度報告：伊井義人「へき地中学校での学習支援を通して育んだ『女子大生と中学生の絆』」『フューチャースクール×地域の絆@学びの場』（伊井義人監修）、六耀社、2014年、119～128頁。

2012年度報告：伊井義人、中村伸次他5名「遠隔地小規模校での学習支援連携の定着への課題：藤女子大学と厚田中学校による2年間の取り組みを振り返って」『藤女子大学 QOL 研究所紀要』第8巻、2013年、77～90頁。

2011年度報告：伊井義人・山村健史他6名「藤女子大学と厚田中学校との学習支援連携：実施初年度の現状、課題そして将来的展望」『人間生活学研究』（藤女子大学）第19号、2012年、63～78頁。

A report on development and change of university students through learning support in remote school

Yoshihito II

(Professor, Fuji Women's University, Faculty of Human Life Science,
Department of Human Life Studies)

Kenji MATSUBARA

(Deputy Principal, Atsuta Junior High School)

This paper aims to report on one year-development and change of university students influenced by the activities related to learning support in remote school (Atsuta Junior High School). The most of students who have participated in this project takes a teacher-training course and plan to become teacher after graduating university. Whenever they visit to remote school to participate in learning support activities, I have asked them written some comments on these experiences on SNS. These feedbacks would give us an opportunity to consider their development and change to become a teacher.

Key words: Learning Support, Remote School, Development and Change of University Students